**ぐじゃぐじゃ様の怪　体験版**

　･･････未来においてその場所は「梅蛇」と呼ばれる地名になるのだが、まだ日本が国として統一されていないこの時代、この土地に正式な名称はなく、周辺の村々からは「禁断の森」として恐れられているばかりであった。

　森の広さは一里四方と決して広くはないのだが、木々はどれもが幹太く、生い茂る木の葉によって空が覆い尽くされているため、森の中は昼間でも薄暗く、夏でもひんやりと肌寒い。不気味な気配が常に漂い、人が立ち入るべき領域でないことが肌で判る。そんな場所だ。

　しかし、森が人々から恐れられているのには他に理由があった。

　森には「ぐじゃぐじゃ様」と呼ばれる化け物が棲んでおり、この化け物に襲われて命を落とした者は少なくなかった。

　ぐじゃぐじゃ様は見た目からして「化け物」と呼んで差し支えない。その姿は巨大なナメクジを彷彿とさせる醜悪な肉塊そのもので、体表は滑りを帯びてツルツルで、全身の蠕動運動によって緩慢に蠢き動くその姿はまさに悪夢そのものであると言わざるを得ない。無数の触覚器官が全身から生えており、口にあたる部分には、何千という鋭い歯が幾重に渡って円環の列を成しており、捕まったが最後、恐ろしい運命を辿ることが容易に想像できた。だが、特筆すべきはなんと言ってもその頭部だろう。頭の頂点に位置する部分にある顔は、ナメクジのソレではなく、紛れもなく人間の男の顔そのものであったからだ。

　ぐじゃぐじゃ様は大昔、この森で祀られていたモノノケと人間の女が交わって生まれた異形の忌み子だといわれていた。周辺の村々には化け物と駆け落ちした娘の話が残されているだけでなく、とある村には、娘の両親が立てたという石碑があった。その石碑には、「祝」ではなく、「呪」の一文字が刻まれており、それは娘の親不孝を嘆く親の心情を表しているといわれていた。

　恐ろしい化け物であるぐじゃぐじゃ様は、普段は暗い森の奥に潜んでいるのだが、時おり、深い霧を伴って、森の外に出てきては人を襲ってさらうと言われていた。そしてそれは噂ではなく紛れもない事実であった。

　犠牲となるのは、決まって若く美しい娘であった。

さらわれた娘がどんな目に遭うか、それはわからぬ。なぜならば、さらわれた娘は、まるで神隠しに遭ったように永遠に行方を絶ってしまうからである。ただ、娘が行方不明となったその夜は、一晩中、禁断の森の奥深くから、悲鳴とも絶叫ともつかぬ断末魔が聞こえてくると言われていた。

　ぐじゃぐじゃ様にさらわれた女のひとりに千代という娘がいた。千代はこの辺りで評判の美人で、村の長である悟助のもとに嫁ぐことが決まっていた。千代と悟助は幼馴染でもあったから、ふたりの結婚を村人たちはたいそう喜んだ。

　だが、祝言をあげる前日のことだ。深い霧が村を襲い、絹を裂くような悲鳴と共に千代がさらわれてしまったのだ。その場に居合わせた者たちは、口々に「大きな影が現れて千代をさらっていった」と震えながら語ることしかできなかった。

　想い人を奪われて悟助は怒り狂った。そして、彼は村人たちが止めるのも聞かずに、刀を持つと、ひとり、「禁断の森」へと入っていったのだった。悟助はその後、筆舌に尽くし難い運命を辿ることになる。

彼が森へ入っていった翌日、村の子どもたちが森の外で蠢くナニカを見つけた。最初は死にかけた獣だと思われたが、違った。悟助であった。この時、悟助はまだ生きていた。ただし、その状態は酷いものだった。両方の目玉は抉られ、全身の骨という骨を砕かれて、手や足はおかしな方向に折れて捻じ曲げられてしまっていた。まさに身体を「ぐじゃぐじゃ」にされてしまっていたのである。悟助は痛みと恐怖で糞便を漏らし、もはやのたうつことすらできない状態にあったが、その間、彼はまるで唄でも謳うかのように、同じ言葉をずっと繰り返していたのだった。

「ぐーじゃぐじゃ、ぐーじゃぐじゃ、おれのからだはぐーじゃぐじゃ。ちよもいっしょにぐーじゃぐじゃ。ああぐーじゃぐじゃ･･････」

その後、悟助はなおも三日三晩「生きて」はいたが、それはただ心臓が鼓動を刻んでいるだけの状態に過ぎなかった。悟助が永遠に静かになったのは、四日目の朝のことだった。ぐーじゃぐじゃ、という弱々しい呻き声が、彼の最後の言葉であった。

　千代が行方不明になり、悟助が悲惨な死を遂げたあとも、周辺の村々では若く美しい娘がさらわれ続けた。そしてそのつど、決まってその晩には、森の奥からは恐ろしい悲鳴と絶叫が聞こえ続けたのである。そのため周辺の村人たちは、より一層の怯えと恐れを募らせて、ただただ恐怖することしかできずにいた。

　この恐怖に終止符が打たれたのは近くの村に旅の剣客がやってきたときだった。

剣客は、宿を借りたその晩に、「禁断の森」に潜むぐじゃぐじゃ様の話を聞いた。そして最初に驚き、それから怒りに駆られた。

「そのような化け物がこの地にいるのか。なんと、酷い。許せん！　我が成敗してくれるわッ！」

剣客が怒った理由ははっきりしている。それはその剣客が女だったからだ。同性が酷い目に遭っていると知って仇を討とうと思うのは、人として、今も昔も大差ない。女剣客は、村人たちが止めるのも聞かずに「禁断の森」に赴くと、そこでぐじゃぐじゃ様と対峙することになる。

　女剣客がぐじゃぐじゃ様と遭遇したとき、その近くには、凌辱の限りを尽くされて果てたと思われる哀れな娘の亡骸があった。どれほど酷いことをされたのだろうか。仰向けで横たわる娘の亡骸は、一糸まとわぬ裸の状態で、腹の皮はブヨブヨに伸びて溶けるように広がっており、穴という穴が、人の頭がすっぽりと入ってしまいそうなほど大きく拡がってしまっていた。文字通りの意味で全身をぐちゃぐちゃにされてしまっていたのである。恐怖と絶望の色を浮かべたままこと切れている娘の亡き顔を見て、女剣客の怒りが頂点に達したのは言うまでもない。

「外道め、死せよッ！」

女剣客とぐじゃぐじゃ様の激しい戦いは一昼夜に及んだ。ぐじゃぐじゃ様は無数の触手を振るい、酸の液を吐いて襲ってきたが、紙一重の差で辛うじて勝利を掴んだのは女剣客であった。

　肉塊のような巨体に無数の致命傷を負い、全ての触手を切り落とされて血の海に沈んだぐじゃぐじゃ様は、死を悟ったのか、まるで詩でも詠むかのように滑らかな口調で辞世を残した。

「よんひゃくねん、よんひゃくねん、うぬのしそんはさいごのひとり。さいごのひとりはおかしてこわした。ぐーじゃぐじゃ、ああ、ぐーじゃぐじゃ･･････」

　女剣客のうむを言わさぬ斬撃が放たれたのはその直後である。その鋭い一撃は、ぐじゃぐじゃ様の首を斬って、その生命を絶ったのであった。

　その後、女剣客は、哀れな娘の亡骸を丁重に弔うと、斬り落としたぐじゃぐじゃ様の頭を持って森をあとにした。

　女剣客の無事な帰還に、村人たちは最初驚き、次いで盛大に喜んだ。世代を超えて恐怖の象徴だったぐじゃぐじゃ様が死んだのからだ当然といえば当然だ。村人たちは女剣客が持ち帰ったぐじゃぐじゃ様の頭を踏みつけ、叩き、蹴り飛ばしたりしたのち、最後は火をつけて燃やしてしまった。村人たちがぐじゃぐじゃ様をどれほど嫌って憎んでいたか、その一事だけで推し量れるというものだ。

　女剣客はその後、村人たちの強い希望もあって、そのまま村に留まって暮らすことになる。なにか思うこともあったのだろう。やがて女剣客は、婿を迎え、子を成し、孫も生まれて幸せのうちにその生涯を終えることになるのだが、ぐじゃぐじゃ様が残した最後の言葉がずっと気がかりだったのだろう。彼女は子孫に向けて遺言を残した。

「蛞蝓の化け物は、いずれ必ず復活し、我が一族に仇を成すに違いない。その刻に向け、気をつけ備えよ」

女剣客の子や孫の中には、剣術や武芸に秀でた者が幾人もおり、彼らは遺言を守って精進した。しかし、人間、五代も経てば先祖のことなど忘れてしまう。くわえて、いくさや飢饉、災害、疫病の蔓延などもあって、女剣客の子孫はやがてバラバラになってその数を減らしていった。そして先祖の警句が忘れられたまま四〇〇年の刻が経ってしまう。

　かつて「禁断の森」と呼ばれたその場所は、明治になって開拓され、戦後、さらに開発が進んで街となった。誰が名付けたか定かでないが、梅蛇市という名前が、令和現在の名称であった。

　　　　　＊

　梅蛇市は人口一〇万人ほどのささやかな街である。

　東北地方の日本海側に位置しており、冬場は深い雪に閉ざされて不便をきたすが、夏は涼しくて過ごしやすい。主要な産業は特に無いが、田園風景が広がる市の郊外には、サッカーグラウンドほどの田んぼが見渡す限り広がっており、収穫した米を使った地酒造りが盛んにおこなわれている。酒の品質は確かで、海外の有名な品評会で受賞した銘柄もなかにはあった。

　かつては深い森だった街の中心部は、昭和の中頃に開発が本格化して、当時としては最新の建物が幾つも建てられている。駅、市役所、図書館、大型商業デパート、そして商店街という組み合わせは、日本の地方でよく見られる光景そのものであった。

　梅蛇市には、小学校が四つ、中学校が二つ、そして市立高校と福祉系の短期大学が一つづつあった。このうち、小学校と中学校は少子高齢化の波を受け、短期大学は介護福祉士の不人気も相まって、いずれもかつてほどの賑わいはないものの、高校はまだ昔のような活気を帯びていた。

　市立梅蛇高等学校には、普通科と進学科と商業科の三つの学科があり、男女合わせて三六〇人が在籍している。バスや電車を使って市外から通う生徒も少なくなく、学生たちが登下校する時間帯の駅周辺は、過疎化が進む梅蛇市でも混雑すること常であった。

　梅蛇駅周辺には、学生たちが立ち寄る店が幾つも軒を連ねている。コンビニエンスストア、大型書店、ゲームセンター、カラオケボックス、ネットカフェ、それに数多の飲食店など。二〇一九年から始まったコロナパンデミックの影響によってシャッターを下ろしたまま開けなくなった店も少なくないが、それでも、めげずに営業を続けている店は数多い。その中に、フィレッツェオという名前のオシャレなカフェがあった。

　このカフェは、駅前に面した五階建てビルの三階にあり、パフェとワッフルが美味しいと評判だった。しかし、六月下旬のこの日、店内に客の姿は少なく、店の奥の一画で三人の女子高生たちが談笑しているだけであった。

　三人は、全員、同じ学校の制服を着ていた。が、その中身は、完全に別ものと言ってよかった。例えるなら、そう、スーパーで売っている二個入り激安半額ケーキと、東京銀座の一等地で売っている超一流パティシエが創ったセレブ御用達の最高級ケーキほどの差があった。

　三人のうち、二人の少女は平凡そのものといっていい。容姿も、体型も、身長も、制服を着こなすセンスも、ドングリの背比べそのもので、特筆すべき点はない。少し太っているといえば少し太っているように見える娘と、少し痩せているといえば少し痩せているように見える娘が、席を前後するようにして座っている。だが、少し太った少女の隣に座っているいまひとりの少女は、ふたりと同じとはとても思えぬ。美少女の概念が具現化したような存在であり、女性として、否、雌としての魅力に富んだ娘であった。

　彼女は、美しかった。小さくて白い顔は容姿端麗の見本のような顔立ちをしており、目といい、鼻といい、唇といい、芸術的なまでの形の良さをしている。化粧はほとんどしておらず、茶色に染めた髪の毛を後ろでしばってポニーテールにしている。首筋や腕はほっそりとしているが、スカートからすらりと伸びた脚は健康そのもので、生命の躍動感に溢れているようだ。胸も大きく豊かであって、制服が内側からはち切れんばかりの大きな乳房は、重力に負けることなく張りとボリュームを保っており、ボタンが大きく外れた制服の上の部分からは、胸の谷間が垣間見えた。お尻はイスに座っているにも関わらず、スカート越しにも尻の形がわかるほどの豊かさを醸し出しており、全身からムチッという擬音が聞こえてくるようだ。豊満にして恵体とは、まさに彼女にこそ相応しい言葉であるといえよう。

　男であれば、一度でも彼女のことを目にしてしまうと、間違いなく見惚れてしまうに違いない。実際、彼女が街中を歩くと、漂わせる色香に本能を刺激され、思わず振り向いてしまう男は少なくなかった。ナンパも、告白も、数えきれないほど受けてきた経験の持ち主でもある。中学時代には、のぼせあがった男性教諭に襲われて犯されそうになったこともあるが、健康的な脚で放った一撃によって股間を潰してやったのは、いまではいい思い出になっている。

　そんな彼女の名前は柏木蘭華といった。年齢は、一七歳。この時、彼女は運ばれてきたスペシャルイチゴパフェを前にして、スプーンをつけないまま、心ここにあらずといった様子で下顎を抑えながら、どこか不機嫌そうな顔つきをしていた。この場にいるのが退屈だからではなく、もっと別の理由があってのことだ。

　前に座っている少し痩せた娘が、蘭華の態度を見て、心配そうに声をかけた。

「ねぇ、蘭華、大丈夫？　まだ歯が痛むの？」

「う～、･･････痛い」

不機嫌そうな表情をしたまま答える蘭華。下顎を抑える手を左右に動かしてさする。実は彼女、昨日、近所の歯科医院で奥歯の治療を受けたのだが、そこがまだズキズキと痛むのだ。歯医者は二時間ほどで痛みが引くと言っていたのに。感情のこもった悪態が、口から飛びだした。

「あのヤブ医者、きっとあたしのおっぱいに見惚れて治療に失敗したんだわ。絶対にそうよ。明日になったらマジでクレーム入れてやるんだから！」

そう言いながら、注文した手つかずのパフェを横に送った。阿吽の呼吸で、少し太った娘がパフェにスプーンをつきさした。幸せそうな表情で生クリームを頬張りながら、感謝の言葉ではなく、追従の言葉を口にする。

「蘭華のおっぱい大きいからね。男だからつい目がいっちゃったんじゃない？　ほら、男って、幾つになってもスケベだっていうでしょ？」

「別に「おっぱい見るな」なんてクレームは入れないわよ。見られるのはいいのよ、別に。減るもんじゃないし、それは慣れてるし。ただ、見惚れて治療に失敗するなって言ってやるの！」

そう言いながら、バッグの中から痛み止めを取り出して飲み込む。気休めにしかならないが、痛みなど、無いにこしたことはない。

　この時、ふたりのやり取りを聞いていて、少し痩せた娘がなにかを思いだしたようだった。

「そういえば、･･････ねぇ、ふたりは知ってる？　駅前の再開発で見つかった奇妙な遺体の話のこと」

「？　なに、それ？」

首を傾げる蘭華。

少し太った娘のほうがなにかを思い出したようだった。

「あ、知ってる！　確か、変な人間の死体が発見されたって話よね」

「そうそう、その話！」

「？」

いまひとつ要領を把握できず、首を傾げたままの蘭華に対して、少し痩せた娘が説明してくれた。

　いわく、現在、梅蛇駅では、駅前の再開発工事がおこなわれているのだが、その最中、地面の下から白骨化した遺体が見つかったというのだ。最初はなにかの事件かと思われたが、遺体の状態からして、四〇〇年前に亡くなった女性の遺体だということがわかった。

　ここで、蘭華は再度、首を傾げた。

「四〇〇年前の遺体なんて、別に珍しくないでしょ。なんか前にも同じようなニュースやってなかったっけ？」

「それがね、不思議なことに、その遺体にはなんと、歯を治療した痕跡があったんだって！」

「歯の治療？」

「そう！　奥歯が削られていたんだけど、その穴に、なんと合金製のインプラントが埋められていたんだって。四〇〇年前の遺体なのによ？　これって、すっごく不思議な話じゃない？」

そう言いながら、少し痩せた娘が、目をキラキラと輝かせながら身を乗り出してきた。彼女の迫力に気圧された蘭華が少し苦笑いを浮かべた。

「Ｓ（すっごく）Ｆ（不思議）な話って奴ね」

昔からそうだ。彼女はこの手のオカルト的な話が大好きなのだ。そのことを、蘭華は承知していた。

「あんたも好きね、その手の話。この前、好きな人の前で、「霧には時空を歪める力がある！」って熱弁してドン引きされて振られたのに、懲りないわねぇ」

呆れたように言いながら苦笑する蘭華。そう言われ、少し痩せた娘は、少しムッとしたようだった。

「その話は本当よ。霧の中でタイムスリップしたり、瞬間移動したり、異次元に迷い込んじゃったり、そのまま行方不明になった事例は世界中から報告されてるんだから！　ノーフォーク連隊失踪事件とか知らないの？」

「知らなーい」

それは一九一五年、第一次世界大戦中に起こった集団失踪事件のことである。作戦遂行中だったイギリス陸軍のノーフォーク連隊が、霧に包まれたあと、忽然と姿を消してしまったという話だ。オカルト界隈では、部隊は異次元に迷い込んでしまったとか、宇宙人に拉致されたのだとかいわれているが、実際は敵であるトルコ軍の強襲を受けて全滅したのだといわれている。しかし、オカルト界隈では、超自然現象による失踪説がいまもなお根強く支持されているのだった。

　ここで、貰ったパフェを食べ終えた少し太った娘が口を挟んできた。

「そういえば、蘭華は夏で学校辞めるって言ってたけど、あの話、本当なの？」

「ホント。学校辞めて東京に行くんだ、あたし」

自主退学という人生の重大な決断を、まるで旅行にでも行くかのような軽い口調で肯定する蘭華。痛み止めが効いてきたのか、語る口調は軽快だ。

「もうね、東京の大手芸能事務所と契約してるんだ。最初はモデルから、それからどんどんステップアップしてくつもり。身体と頭には自信があるから、持てる力は全部使って、成りあがってやるつもりよ」

身体については見ての通りの豊満恵体だが、実は彼女、頭がよく、在籍は進学科であり、学年三位という頭脳の持ち主なのだ。それを知っているからこそ、少し痩せた娘は、親友が下した決断に素直に賛成できない様子だった。

「でも、なんだかもったいない気がするなぁ。東京に出るのは、学校を卒業してからでも遅くないんじゃない？」

「ダメ。女にとって若さは最大の武器なのよ？　生かすなら、早いにこしたことはないわ。それにあたし、歳をとってから「あの時に決断しておけばよかった」って後悔したくないからさ。だからいま決断するの」

そう言って蘭華は笑った。笑うと、その豊満恵体に似合わず、まるで子どものような印象を与える彼女だった。

　三人はその後、しばらく談笑したあと、外が暗くなってきたので家路につくことにした。

　三人がビルを出たとき、外は深くて暗い霧に覆われていた。だが、別に驚くことではない。この街では時おりこのような濃い霧が出ることがあるからだ。ゆえに、三人も気にしなかった。

「じゃ～ね～」

「また明日」

「また学校でね」

三人の家路はそれぞれ方向が異なる。ビルの前で別れの挨拶を交わすと、霧の中をそれぞれの方向に向かって歩きだした。

　ひとりになった蘭華は、街灯と夕暮れの薄明りを頼りに、自宅に向かって新しく舗装されたアスファルトの道を進んでゆく。何処かに寄り道しようとも思わず、大きな乳房を揺らしながらの帰宅であった。

　その最中、ふと、一瞬で――世界が変わってしまったのだが、霧があまりにも深かったため、蘭華はそのことに気づかなかった。気づけなかった。

「それにしても深い霧ねぇ。一寸先も見えやしないわ」

そう言った時だ。

　彼女は足元のなにかに躓いた。

「あッ、痛ッ。――な、なによ、もう！」

そう憤りながら足元に目を向ける。地面を見て、蘭華は驚いた。

「え･･････木の、根？」

そう、そうなのだ。彼女が躓いたソレは、地面から露出した太い木の根っこだったのだ。

「へ？　なんでこんなのが、ここに？」

困惑する蘭華。その時だ。まるでザーッと音を立てるように深くて濃い霧が晴れたのは。周囲を見晴らすことができるようになった時、蘭華の鼓動が大きく鳴った。

「･･････え、は？」

一瞬、事態が呑み込めなかった――というよりも、なにが起こったのか理解できなかった。なぜならば、霧が晴れて周囲を見渡せるようになったとき、視界に飛び込んできた光景は、いつもの見知った街中ではなく、何処とも知れない深い森の中だったからだ。

　樹、樹、樹、四方八方、見渡す限り、辺り一面「樹」ばかりだ。細い木があり、太い樹があり、どれもこれも不揃いだが、林立しているといっていいほどたくさんの樹が生えている。

恐怖と不安が一気に襲いかかってきたのは、おそらくこの直後だったに違いない。肩にかけていた通学バッグがズルッと滑って、ドサッと地面に落ちた。

「な、なに、なんなのよ、コレ･･････いいいいったいぜんたい、な、なにがどうなってるの？　な、な、なにが起こったっていうのよぉぉぉぉッッ！？」

狼狽する蘭華。怯え、震え、うろたえながら、動揺を隠しきれないといった様子で頭をガシガシと掻き毟る。しかし、なにが起こったのか理解できない。その時だ。さっき別れた友人が語っていた「霧」にまつわる話を思い出したのは。

『霧には時空を歪める「力」があってね、霧の中でタイムスリップしたり、瞬間移動したり、そのまま行方不明になった事例は世界中で報告されているんだから――』

ドグン――と、蘭華の鼓動が大きく鳴った。恐怖と不安が、まるで津波のような勢いで襲いかかってきた。

「も、もしかして、アタシ――異世界に迷い込んじゃったんじゃ･･････」

と、最近ブームになっている異世界転生系作品群を思い出し、蘭華は震えた。無意識に、人差し指を噛んでいる。その時だった。深い森の奥から、低く恐ろしい声が聞こえてきたのは。

「――じゃ、ぐーじゃぐじゃ」

「！」

突然、森の奥から聞こえてきたその恐ろしい声を聞いて、蘭華は思わず声がした方をバッと見た。気のせいかと思ったし、思いたかった。が、その声は気のせいではなかった。

　響く声が、どんどん大きくなってきた。

「ぐーじゃぐじゃ、ぐーじゃぐじゃ、ああぐーじゃぐじゃ･･････」

「な、なに、この声･･････っていうか、どんどん近づいてきてない･･････？」

　ずるぅー、ずるるぅー、という、なにか巨大なモノが這いずるような音もしてきた。

　声が、さらに近づいてきた。

「ぐーじゃぐじゃ、ぐーじゃぐじゃ、におうぞにおう、ぐーじゃぐじゃ･･････」

「な、なに･･････い、いったい、なにが･･････！」

巨大な影が薄っすらと見える。その影が、どんどん大きくなってきた。そして、次の瞬間、蘭華の目の前にぬぅぅっ、とその姿を現したのである。

「ぐーじゃぐじゃ、ぐーじゃぐじゃ」

「きゃあああああああああああああああああッッッッ！」

　　　　　　　　　　　　　･･････続きは本編でお愉しみください。